

会報

No. 50

平成12(2000)年1月15日

京都府図書館等連絡協議会

事務局

京都市下京区西七条八幡町31
京都府立図書館仮施設内
TEL (075)321-0200

五十号によせて

京都府図書館等連絡協議会 会長 村上康夫

京都府図書館等連絡協議会の発行する「会報」が第五十号を迎えました。

第一号の発行が昭和五十八年六月でありましたから以来十六年余り、京図連協の動きを多くの方々に届け来た訳であります。発行当時と比べ図書館の数も随分と増えましたが、図書館活動の振興に「会報」が果たした役割は計り知れないものがあります。

関係各位のこれまでのご尽力に深甚なる敬意と感謝を申し上げますとともに、このような記念すべき会報に一文を寄せることが出来ましたことを幸せに思います。

ご承知のように今日、社会情勢の急激な変化に伴い、図書館をとりまく環境も大きく変わってまいりました。



高度な情報通信社会の発展は、図書館のスタイルを変えつつあり、今後図書館が提供するサービスは、多様化、高度化することが予想されます。

このような中で、京図連協の各館は、環境変化に対応する努力を続けていますが、今、大切なことは、生意気なことを言って申し訳ありませんが、図書館発展のための長期的視野に立った目標をしっかりと持つことではないでしょうか。

ことに地方分権の推進が叫ばれている中、既成概念にとらわれることなく社会の変化に添った目標を立てることが必要だと思います。

「会報」も広報委員に毎回大変苦勞を掛けていますが、第一号発行時の精神を堅持しつつ、情勢変化に応じた広報の在り方を更に追求し、製作にあたるのが大切であろうと考えます。ことによると「会報」のスタイルは、近い将来、新府立図書館がインターネットを利用したネットワークシステムを構築されるように、インターネットの活用を考える時が来るかもしれません。

いざれにしても、柔軟な発想で

「会報」づくりを進めていただくようお願いいたします。ただこうしたことは、広報委員だけでなく京図連協の各館も広報が果たす役割を深く認識し、今まで以上のご支援、ご協力をお願いいたします。

最後に五十号の発行を一つの節目として、「会報」がさらなる伸展を続けますとともに各図書館、図書館施設の益々のご発展を祈念いたしまして所感の一端とします。



「会報」No.1 1986.6

会報創刊号発行のころ

精華町立図書館
(当時 京図連協会長) 澤田 種治



このたび、連絡協議会の会報が五十号の発刊となり、日々の移ろいの早さを感じるとともに、この会がこれまでに歩んできた活動を振り返るとき、会報が果たしてきた役割を改めて評価し、たく思っています。

ところで、この会報を発行するところになった動機は、私が昭和五十七年に会長に就任後、活動が非常に停滞していた京都府下の公立図書館の振興を図ることを願い、これまで事務局が中心となって取り組んでいた会務を、加盟館の参加による担当方式に改めました。そこで活動を推進させる組織として研修研究、相互協力、広報の三委員会を設置しました。この委員会のまとめ役に協議会から理事が就任し、委員には加盟各館から館長以外の職員に参加してもらい全組織をあげて会務を執行することにしました。昭和五十八年にまとめたこの会の委員会規則には図書館の振興、図書館相互の連絡と協調さら

に調査研究事業などを行い、京都府の図書館事業等の振興と施設相互の協力をすることを目的にしています。そこで広報委員会ではこの方針をうけて、それまで不定期で発行していた「協議会ニュース」を充実させ会員相互の交流と情報を提供することで、府下各地ががんばっている職員に、図書館に関する情報を提供して日々の業務に活かしてもらい、そこから図書館活動のさらなる活性化をめざしました。

そこで会報の創刊に際して、会長のあいさつのなかで私は住民の図書館に寄せる期待や関心が高まりはじめこれからはこの事業を推進・拡大するには課題が多くあり、その解決に向かつてあせらずに着実に前進させることを約束しましたが、いまその成果はどれだけのものとなっているのでしょうか。まだまだ解決しなければならぬ課題が多くあります。会報創刊時の京都府内の図書館数は市立で七館、町立では六館で全国水準では指定都市を持つ府県のなかで最低のところでした。あれから十六年が経過して、いまだ市立図書

館は全市に設置され、京都市をはじめ四市には複数館があり、町立図書館も十一町となり、それぞれの図書館が特色を発揮して住民に期待される活動を展開しています。その実績は京都府全体の年間個人貸出冊数では一、〇〇八万冊(一九九八年)これは京都府民一人当たり三・八冊でやっと全国平均のところまで到達してきました。

平成十三年には待望の京都府立図書館が新しく開館する予定でいま建物づくりをはじめ開館の準備を着々とすすめています。この新館の開館で府立図書館が京都府の図書館活動

※

の拠点となり、府民の情報基地としての役割を果たし、さらに府下の図書館の活動を支援する図書館として運営される日が近づいてきました。新館の開館で協議会の任務も新たな展開を迎えることになるかと推察します。

この会報は十六年間にわたり歴代の広報委員が編集のつど紙面づくりの知恵を出してがんばっていただきました。とくに巻頭を誰に書いてもらうか随分苦労されたようです。会報はこの会がたどってきた貴重な足跡の財産です。これからも大切に育んでいただくことを願っています。

子どもと本の魅力をさぐる

一泊研修に五十名が参加

平成十一年度第一回研修会は、九月九・十日京都市(京都簡易保険会館かんぼーる京都)において実務研修会(一泊研修)を開催しました。

初日は、滋賀県高月町立図書館館長明定義人氏に「子どもと本の魅力をさぐる」と元京都女子大学付属小学校教諭大石進氏に「感動が読書習慣をつくる」「読み聞かせ」子どもと本を結びお手伝い」と題して、二人の講師に講演していただきました

た。現役の館長と元教諭の対照的な組合わせでしたが、それぞれの立場から公共図書館が果たさなければならぬ子ども達への読書推進活動の大切さについて話されました。二十七名の方からアンケートの回答が寄せられました。皆得るところが多かったようです。

夜は、楽しい交流会のあと八時から大石進氏に「おはなしとゲームの実際について」の実技講習をうけま

した。

二日目は、京都府立総合資料館、京都コンサートホール、京都府立陶板の庭を見学し終了しました。

今年度は、講演会、交流会、実技講習会、施設見学会と盛り沢山のメニューでしたが、五十名の参加者があり、大変充実した内容の研修会が開催できました。



一泊研修会から

京都市洛西図書館 戸田佐恵子

九月九日「子どもの本の魅力をさぐる」と題された滋賀県高月町立図書館長、明定義人氏の講演は、まず高月町立図書館が、特に一九六〇年

（八〇年に生まれた人々を対象とし

てきたという処から始まった。高度経済成長期に入る一九六〇年を境として、核家族化と、それに伴う家庭での子育ての変化は、子供達の環境を大きく変えたという分析の基に、従来型の図書館では、彼らの要求に応える事が出来ないのではないか、という問いかけだった様に思う。その事は、昨今の若者の読書離れや、「読まれる本がわからない」といった事を考えた時に、非常に説得力のある事として心に響いた。その理解があつて、アダルトチルドレンの持つ問題性や、ヤングアダルトを対象とした一連の作家達の存在が見えてくる。単なる現象面としてしか、捉えていなかつた事が反省させられた。無論、変わるものと、変わらないものとがある事を踏まえた上で、今まで自分が自らの読書体験のみ、手懸りとしてきたのではと思つたのだ。又「感動が読書習慣をつくる」と説かれた大石進氏の講演では、学校や図書館などでの「読み聞かせ」がまぎれもなく、子供達と本とを結びつけていると、その実体験を基に熱く語られた。

図書館がいつの時代も、本好きの人達の為だけでなく、本好き以前の子ども達、大人達の心を把らえる事が出来たら、その時こそ、「図書館

は、セルフエデュケーションの場」であり、「成長する有機体である」という事が、大きな意味を持つてくる。その事を深く心に刻んだ一日だった。



おはなしのすばらしさを再確認

舞鶴市立西図書館 竹之内英子

久しぶりに宿泊研修会に参加させていただきました。

今回は、「読書の楽しさと出会い」や「お話とゲーム指導」などに焦点をあてて、二名の講師の方にお話を伺い、勉強させていただきました。

最初は、明定義人氏の講演「子どもの本の魅力をさぐる」をお聴きしました。アダルト・チルドレン世代が今の子どもたちの親となり、家族関係が変わってきている今、求められている新しい児童文学について話をされました。又、マンガの貸出や配架の工夫など、高月町立図書館の試みは、「なるほど」と感心させられました。

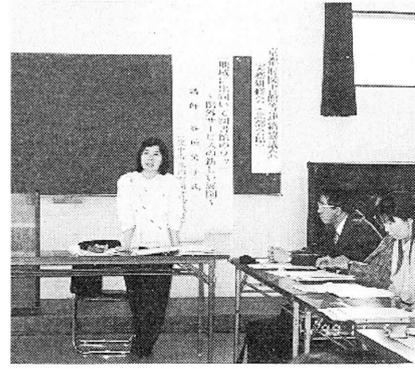
次に、大石進氏に「感動が読書習慣をつくる」と題して講演をしていただきました。二〇〇二年から総合的な学習の時間が始まることにより、学校と公共図書館の協力が今までの以上に必要になり、又先生からの要望も増えるだろうというお話は、喜ばしいことではあるのですが、なんだか恐ろしくもあります。

夕食を兼ねた交流会の後は、大石先生に「おはなしとゲームの実技」を教えてくださいました。日頃よく語ったり、聞いたりするストーリーリーディングとはひと味違った大石先生の表情豊かな語り引き込まれ、お話のすばらしさを再確認しました。

二日目は、コンサートホール等見せていただいていた良かったのですが、どうせなら、もっと実技講習に時間をさいていただき、先生方にゲームなど教えていただきかったと思えました。

「地域に出向いて図書館のワッ」

北部研修



況などを報告し合い、和やかな雰囲気が進められ、予定時間を三十分以上超過する有意義な研修会となりました。

北部研修会に参加して

綾部市図書館 深山 智由

平成十一年度第二回研修会は、十一月五日宮津市（宮津市労働会館）において開催しました。

講師に大阪府豊中市立岡町図書館職員の谷垣笑子氏に「地域に出向いて図書館のワッ」〜館外サービスの新しい展開〜と題して講演していただきました。

講演の内容は、移動図書館車や団体貸出しを通して、「すべての子ども読書を保障する」を目標に学校や幼稚園、保育所・子供文庫などと積極的に連携、協力していく実践報告をしていただきました。参加者は、時代を先取りした先進的な取組に多くの学ぶ点を見出だしたようです。机をコの型に囲み、各館の取組の状

十一月五日の北部研修に参加して、『「地域に出向いて図書館のワッ」〜館外サービスの新しい展開〜』をテーマに講師、谷垣笑子氏（豊中市立岡町図書館）の図書館サービスについてお話を聞きました。

その中で図書館を利用しない子どもたちや、障害者・高齢者への本の提供をどのようにすればいいのか？ そのためには絵本やおはなしとの出会いの機会を多くつくって、日常、図書館を利用しない子どもたちへ本を提供する。けれども問題点としては、本を手にとる子、とらない子ができてしまう。それには、その周りにいる親達への働きかけが必要。また、障害者・高齢者への本の提供には、ボランティアやヘルパー、看護

婦の研修の場へ足を運ぶなどして、協力を得ることが大切などと、豊中市での実践報告をもとにわかりやすく説明され、綾部市図書館でもっと参考にしなくてはならないのではないかと痛感しました。

また、「図書館という公共施設は誰もが気軽に足を運ぶことのできる場所ですが、来館してもらい、そして利用して頂くことにより、はじめて価値がある施設だ」と、いわれた講師の言葉……私も同感しました。

図書館ルネッサンス・滋賀

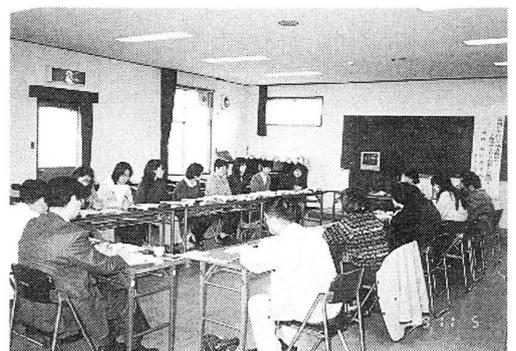
全国図書館大会に参加して

木津町中央図書館 中谷 昌子

図書館法が制定されて五十年という時に地方分権推進の潮流の中、図書館法改正と、国の図書館政策が大きく動き出しています。

高度情報化社会は、図書館が提供する資料についても、印刷物から電子媒体を含んだものへと急激に変化し、今まさに図書館変革期、ルネッサンスの時代です。

情報・メディアの多様化が加速していく中で図書館が人々に資料を提供するという基本理念を守り、将来



の図書館の発展の方向を見据えた視点で論議が深められ、これから図書館に働く司書の専門性と力量が今まで以上に住民から問われる時代に入ってきたという意見が多数でした。

図書館法一部改正が論議を読んでいます。

図書館法第十七条の無料公開条項については改正されなかったが、一九九八年十月の生涯学習審議会図書館専門委員会の報告では電子情報アクセスについての対価徴収を各自治体の判断に委ねるべき問題としました。この点について論議が深まり、住民に役立つサービスをどんな形で、行いその際の費用負担はどうあるべ

きか考えることが重要であり、図書館界としては商用データベースへのアクセスを低料金にしていける方向を求めていくことが提案されました。自治と文化の創造県をキャッチフレーズにしている滋賀県という地で新しい図書館の方向性をめぐって議論が交わされ、心身ともにリフレッシュできたすばらしい大会でした。

児童・青少年サービス分科会に参加して

京田辺市立図書館 辻 玲子

十月二十八日、大津市民会館で行われた全国図書館大会の第七分科会（児童・青少年サービス）に参加しました。

午前の基調講演は、「子どもと本を結ぶために」というテーマで、公共図書館の児童サービスの大切さや文庫・公共図書館・学校図書館の役割とお互いの協力体制について話されました。その中で最も印象に残ったのは、「今の利用者の要求や期待を満たす―この結果が出るのは人の面からみて、短くとも二十年はかかる。つまり、今子どもである利用者が、子どもをもち、さらには孫をもったとき発揮されるのだ」という言葉でした。子どもを知ること、資

料を知ること、そして、子どもと本を結びつけることの大切さを改めて感じました。

午後は、文庫・公共図書館・学校図書館でそれぞれ子どもたちと接してこられた、三名の方々のパネルディスカッションでした。各施設によって子どもに関わる方法はさまざまでしたが、その姿勢には共通したものが多くありました。これから先、子どもたちの安心や信頼関係を保つためには、館種を越えた協力が必要であることを学びました。

また、講演の間の休憩時間には、各施設の利用案内や資料紹介等の印刷物をいただき、自館との取り組みと比較することもできました。

日常業務に戻ってからも、児童サービスについていろいろ考えることのできる有意義な研修でした。

新加盟館紹介

久美浜町図書館

本年度より協議会に加盟させていただきます。久美浜町図書館です。

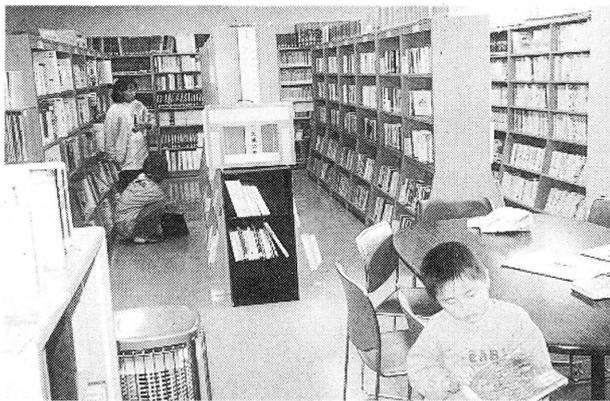
久美浜町は、京都府の最北西端に位置し、西は兵庫県豊岡市、北は日本海に面した人口一万二千人余りの町です。

久美浜町図書館は、町民の要望が

強く長年の課題でしたが、久美浜町教育委員会事務局の移転に伴い、平成三年七月二十日に書架スペース七五・九㎡、約一万冊で開館しました。その後、京都府立図書館から六千冊をお借りするとともに、新規購入や町民からの寄贈等あわせて現在の蔵書冊数が約一七、六九六冊になりました。隙間だらけだった本棚も少しずつですが、充実してきました。

平成十年度の利用者数は、五、九五〇人、貸出冊数は一五、四九〇冊です。京都府立図書館のご協力により、今ではリクエストも増えてきています。

開館日は、月曜日から土曜日の午



後一時から午後五時まで開館しています。そのうち、第二・第四土曜日は午前九時から午後五時までの開館としています。

図書室としての事業は、遠くまで行かない子どもや地域の人のために、夏休みを利用して町内小学校七校を二回ずつ巡回する「移動図書室」を実施しています。また、月に一回、久美浜町有線放送を利用して、新しく入った図書や本の内容などを紹介しています。

まだ小さな図書室ですが、図書の充実を進めるとともに、気軽に立ち寄れるような身近な図書室づくりに努めていきたいと思っています。

○ ネットワーク特別委員会

前回、おしらせした府教委による市町村説明会は、予定の七月より遅れ、九月一日から三日にかけて四会場で行われました。

この中で示されたスケジュールでは、ネットワーク参加は府立図書館の開館に合わせてスタートするが、より早い段階でテスト・検証のための試験運用への協力を呼び掛けています。

しかし、参加を予定している図書館では、自館図書館業務パッケージソフトの改造費すら見積れていない所が多い状況です。

このためネットワーク委員会では、府教委に対し、各コンピュータ会社と府委託のコンサルタントとの詳細打ち合わせを急ぐとともに、今年度中に設置を目指している「総合目録ネットワーク運営協議会(仮称)」の設置を早め、この中で市町村が抱えている、諸々の問題を協議していくよう提案することになっています。

また、具体的な参加手続き事項、受付開始日など、各図書館が余裕をもって臨めるよう要望していきたいと思っています。

○ 研修研究委員会

今年度の研修は、九月に京都市で「児童サービスをテーマ」に一泊研修会(中部会場)を、十一月に宮津市で「館外サービス」をテーマに実務研修会(北部会場)を開催いたしました。

今後の日程は次のとおりです。

実務研修会(南部会場)

日時 平成十二年二月四日(金)

場所 久御山町ふれあい交流会館

ゆうホール

テーマ ヤング・アダルトサービス

講演 愛がほしくてたまらない

〜思春期の性〜

講師 児童文学者 越水利江子氏

講師紹介

京都市在住、画家田島征三氏と出会い絵筆を持つ『風のラプソディ』で第二十七回日本児童文学者協会新人賞・第四十五回芸術選奨文部大臣新人賞受賞。

主な作品 教育画劇

フレンド 岩崎書店

ファースト・ラブ 岩崎書店

風のラプソディ 岩崎書店

京ことば玉手箱(絵)ユニプラン

参加申込

期日 平成十二年一月十五日(土)

宛先 宇治田原町図書館奥山一紀氏

昨年八月に開館した複合施設です。見学会も行いますので多数ご参加くださることを期待します。

○ 相互協力委員会

今年度の相互協力委員会の事業は相互貸借事業の推進、相互協力担当者会議の開催、その他の計画ですが特に、相互協力担当者の会議の開催については、府立図書館の新館準備等に伴う今後の業務計画の方向等によって、委員会活動や相互協力活動も大きく左右されかねないという事情があり、その状況を見極める必要から、若干遅れてはいましたが、ようやく十二月十五日に府立総合資料館において開催されました。

担当者会議においては、府立図書館関係者から、新館オープンまでの見通しや、市町村支援の今後の在り方等について説明を受けました。とりわけ、本年度二月から、府立図書館の新館準備等の都合により、資料の運用が不可能となり、協力貸出・リクエスト等が休止されることについて説明がありました。

担当者会議では、それへの対応策や、市町村間の相互貸借活動の強化・ウォンテッドの具体的方法等について熱心に論議がかわされました。また、京図連協未加盟館への相互貸借の在り方や相互貸借伝票の様式等の具体的な検討も行われました。担当者会議で話し合われた詳細については、後日、各加盟館宛て連絡を行う予定です。

今回、第五十号という節目の会報を編集するにあたりまして、ふと誰かが言った一言、「第一号ってどんな内容だったのでしょうね?」と。さすが総合資料館(今回の広報委員会の会場です)、即座に第一号の会報が用意されました。内容を見てビックリ!よくここまで同じような形式を続けてきたものだ。変わったのは、紙の質と大きさだけ!誇りに思っているのか、この惰性を反省すべきなのかと、複雑な思いがしました。

情報の最先端を常にいきたい図書館としては、「日進月歩」もたまには、大切ではないか。と、思う今日この頃です。

次号は三月十五日付で発行の予定です。

